

---

# 特別短編 仮面ライダーガイア

神崎はやて

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

特別短編 仮面ライダーガイア

### 【Nコード】

N7315T

### 【作者名】

神崎はやて

### 【あらすじ】

NEVERによる風都タワー占拠事件から数年。

T2ガイアメモリは仮面ライダーWの活躍によって破壊され、風都には平和が戻った。はずだった。

だが、人々が知らぬ間に、水面下ではT2計画はまだ続いていた。

再び町にばら撒かれるT2と呼ばれるAとZのガイアメモリ。

これは、その全てを回収する責を担う1人の少年の、戦いの記憶。  
その、ワンシーンである。

「う、た、助けてくれ……………頼むよっ!」

とある都市、その裏路地。

その暗い、光差す隙のない闇の世界に、若い男の命乞いをする掠れた声が響く。

青年とて、この辺りでは名の知れたチンピラだった。

どんな奴でも、その拳1つでひれ伏す。

誰も自分には敵わないのだと、一度は豪語して見せた、絵に描いたような不良。

だが、今はどうだ。

彼は情けなくも、恐怖から涙や鼻水を垂れ流しにして、目の前の存在へ命乞いをしているのだ。

だが、それも彼の目の前にいる存在を見れば、情けないなどという形容は1瞬にして吹き飛ぶ。

それは、人間ではない。否、人間の身体を借りたバケモノである。

鳥が巨大化し2足歩行をするようになったら、おそらくこうなるのであると推測できる姿。

所謂、鳥人間。それが今、彼が命を助けてほしいと、見逃してほし

いと願う存在。異形の怪物だ。

この存在には、全てが無力。

この男の、弱きものから搾り上げ私腹を肥やしてきた拳程度では、傷1つつけられぬ程度には、異形はその見た目に違わぬ戦闘力を有していたのだ。

恐怖に満ちたその声に、それまで黙っていた異形が初めて声を発した。

「許すはずがないだろう。お前があの時金を取らなかつたら……俺は……！」

怒りを声に滲ませながら、異形はゆっくりと男へ近寄っていき。

「待てっ！」

刹那、2人以外は誰もいなかったはずの路地に、1人の少年の声が響く。

誰だ、と、異形と男は、同時に声の方向を向いた。

そこにいたのは、声の高さから推測できるとおり、少年だった。黒のズボンに、黒いロングコートを纏った姿。

その黒髪の上は、更に黒の帽子が覆っている。

黒、黒、黒。

全身、黒一色の少年。黒でないとどこかといえば、コート下の白のシャツくらいのものだ。

「何だ、貴様は」

異形は問う。

お前は何者かと。

この処刑の場に似合わぬその無垢なる目は、どこを見ているのかと。言外にここに来るべきではないと言い放つ異形を、少年は動じるでもなく真つ直ぐに見据えた。

それもそのはずである。

少年の目的は　　まさに、その異形そのものなのだから。

「そこまでだ。これ以上罪を重ねるな」

「フン、ただの子供が何を言う。俺はな、この屑に制裁を加えてやっただけだ。正しいことをしているんだよ！」

「違う！」

少年は叫ぶ。

力を込めて、迷いもなく。

「アンタがやってることは制裁なんかじゃない、ただの殺人だ。認

めるわけにはいかねえな」

「へえ？ だったら、どうすると？」

鳥人間は、明らかに少年を見くびっていた。

見下しきったその口調が、その全てを物語っている。

だが、それは間違い。

完全に格上だと思っっている目の前の少年は、彼が思っている以上に強い。

「俺が止めてやるよ。……………力づくでも、な」

言いながら、少年はコートの中から1つの物体を取り出した。

それは、何かのスロットのようなもの。

赤と黒に塗り分けられた土台の上から、銀色をした何かの挿入口が露出している。

少年はそれを、腰の前へ軽く押し付けた。

脇のサイドハンドル付近からベルトが飛び出し、物体をバックルとして少年の腰に巻きつく。

そして、少年はもう一つ、コートの中からあるものを取り出す。

それは、USBメモリのような形をした物体。

全体的に黒い色をしており、中心には道化の靴のような意匠の」の

文字が描かれていた。

「それはっ!」

USBメモリを見て、異形が明らかかな動揺を見せる。

それにほくそ笑みながら、少年はUSBメモリ  
地球の記憶を宿すとされるアイテム、ガイアメモリのプッシュスイッチを押した。

『JOKER!』

渋い男性の声の機械音声、ガイアワイパーが鳴り響く。

こうして起動を確認したガイアメモリ、切り札の記憶を宿すジョーカーのメモリを、少年はバツクルのメモリスロットへ挿入し、サイドハンドルを引いた。

「変身っ!」

『JOKER!』

再びガイアワイパーが鳴り、少年の身体を黒い異形の体が覆い隠していく。

まるで少年の姿を体現したかのように全身を黒で覆ったその姿は、ジョーカーのメモリを使用した少年の力の象徴。

額にはVの文字を模るホーンが形成され、大きく紅い複眼が黒に映えて輝く。

「仮面、ライダー……………!?!」

異形は、少年の?その姿?の名を呟き、怯えたように後ずさる。

「仮面ライダー……………ガイア。知っててくれて光栄だ、よっ!」

手首をスナップさせ、仮面ライダーとなった少年は駆け出す。

一直線に異形へと走ると、その黒き拳で異形を殴りつける。

「はっ、でえやっ!」

「ぐっ、くそっ!」

異形も負けじと応戦し、仮面ライダーの拳を受け止め、打ち返そうと試みる。

だが、その尽くが仮面ライダーの掌底に流され、まるで捉えることが出来ない。

更に。

『ACCEL!』

新たに取り出されたメモリのガイアウィスパーが唸ると、仮面ライダーは左腰にあるメモリのスロットへそのメモリを挿入する。

『ACCEL! ATTACK DRIVE!』

「おらっ！」

「がっ!?!」

途端、仮面ライダーの動きが一気に加速した。

到底捉えきれぬ速度で打ち込まれる拳、蹴り。

異形は当然の如く耐え切れず、ついに仮面ライダーの拳に突き飛ばされた。

数メートル吹っ飛び、その後も勢いの止まらぬ身体はコンクリートの地面を転がり続ける。

そうして漸く止まったその時、異形は立ち上がり悔しげに地団太を踏んだ。

「くそっ、くそっ! どうしてだ! 俺は正義の味方として、当然のことをしようとしているだけなのに!」

「違う。お前のやっていることは正義なんかじゃない!」

「だ、黙れ黙れ! お前の言うことなんか聞くものかっ!」

癪癪を起こした子供のように喚くと、異形はその背の翼を羽ばたかせ空へ逃げようとする。

「いくらお前でも、ここまでは追ってこれないだろ!」

「ははっ、そいつはどうかかな?」

嗤いながら、仮面ライダーはメモリスロットからジョーカーメモリ

を引き抜くと、別のメモリを取り出してプッシュスイッチを押す。

『LUNA!』

ガイアウイスパーが流れたメモリを、ジョーカーのメモリの入っていた場所へ押し込みサイドハンドルを引く。

『LUNA!』

2度目のガイアウイスパーに続き、鳴り響く？ルナ？の幻想の記憶。

ジョーカーの姿形はそのままに、黒い体表だけが黄金に変化した仮面ライダーは、手を、空中にいる異形へ向けて伸ばした。

普通なら、決して届かぬ距離。

だが、その？普通？の範疇から逸脱した？幻想？の記憶を宿すルナのメモリを使用した仮面ライダーは、それを可能にする。

まるで？幻想？の如く、人体の限界を超えどんと伸びていく腕。

それは仮面ライダーのいる路地を挟む建物をも越え  
に逃げて、高をくくっていた異形の身体を絡めとる。 空中

「なっ！……ぐああっ!？」

そのまま地面へ叩きつけられ、衝撃に異形は悶絶し呻いた。

その先で、仮面ライダーは悠々と手首をスナップさせると、新たなメモリを取り出した。

『ICE AGE!』

プッシュスイッチを押したメモリを、左腰に装着されたスロットへ挿入し、メモリスロットのスイッチを叩く。

『ICE AGE! ATTACK DRIVE!』

鳴り響く音声と共に、仮面ライダーが突き出した右掌から冷気が噴き出し異形の身体を凍りつかせた。

「ぐっ……動け、ない………」

異形は抜け出そうと力を込めるが、アイスエイジメモリの力で凍りついた身体は簡単には動かすことは出来ない。

もがくことすら許されない異形に、終わりの時は刻一刻と近づいていた。

「こいつで決めるぜ!」

宣言し、仮面ライダーはバックルからルナメモリを引き抜くと、今度は右腰のメモリスロットへと挿入しスイッチを叩く。

『LUNA! MAXIMUM DRIVE!』

左のアタックドライブは、メモリの力を技という形にして引き出すもの。

そしてこのマキシマムドライブは、仮面ライダーの力の粋。



リを拾い上げた。

メモリには、はっきりとBを表す絵文字が描かれている。

BIRD

鳥の記憶といったところか。

絵柄もそれを表すものとなっているし、先程の怪人の姿からしても、おそらく間違いないだろう。

少年は拾い上げたメモリを、アタッシュケースの中へ収納する。

見れば既にケースの中は、何本かのメモリで埋まっていた。

「AからZ。まだまだ……先は長いな」

少年はそう溜め息をつくくと、ケースを閉じて路地の奥へと歩き出す。

残されたのは倒れ付す男、ただ1人。

既に襲われていた不良も逃げたその路地には、再び日常と変わらぬ静寂が戻ろうとしていた。

## (後書き)

どうも。初めましての方は、初めまして。常連の皆様はこんにちは。神崎です。

仮面ライダーWの短編、楽しんでいただけたでしょうか？

ある程度はあらずじを読んでいただければ解ると思いますが、この短編は劇場版仮面ライダーWの物語りから数年後の時間軸を舞台に、Wとは違った仮面ライダーの、T2メモリを巡る戦いを描く、という構想の一部分です。

本来ならばディケイドが完結した後に次回作候補として挙げる予定でしたが、ディケイドが当分終わりそうにないということと、神崎自身のW熱を抑え切れなかったため、今回執筆に踏み切りました。完全に趣味に走ってますが、楽しんでいただけたのなら幸いです。

さて、ここで仮面ライダーギアの解説を。

外見は、少々形は変わってますがほぼ100%仮面ライダージョーカーをイメージしていただければ大丈夫です。

更に、右腰のマキシマムスロットの他に左腰にアタックスロットと呼ばれるメモリスロットを持ちます。ここにメモリを挿入することで、様々な技を発動することが可能になるわけですね。今回で言えば、アクセルとアイスエッジで使用しています。

これは、エターナルの全身マキシマムドライブからヒントを得た形

ですね。

そして、主人公の名はまだ決まっていなかったためまだここでは少年と表記されていますが、この少年に関して妄想が沸々と……！  
とりあえず確定しているのは、この少年が仮面ライダーとして戦う  
主な目的。

あらずじに書いたとおり、散らばったT2を全て回収することです。

これは、遊戯王ゼアルのナンバーズの設定が面白そうだったので、  
「だったら、劇場版のようにT2が散らばって、同じようにそれを  
集める物語とか造ったら面白そうじゃないか？」という考えからき  
ています。毎回毎回ドーパントが現れて、そいつを倒してメモリを  
回収、そうして強くなっていく、というw  
敵を倒して力を得ていくこういった形は、仮面ライダー剣にもあっ  
た手法ですね。

さて、そんなわけで、この作品はまだまだ構想の域を抜け出ない作  
品です。

しかしながら、神崎の中ではかなり構想の纏まった作品でもあり、  
今すぐにでも作品にすることすら可能です。

ですから、これをお読みになった読者の皆様へ伺います。

仮面ライダーガイア。連載化されたら、読んでみたいですか？

感想やメッセージ、お待ちしております。

それでは。長くなりましたが、これで終了とさせていただきます。

ここまでのご読了、心より御礼申し上げます。

以上、神崎でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7315t/>

---

特別短編 仮面ライダーガイア

2011年10月6日14時18分発行